

令和5年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業



令和5年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業(主催＝日本武道館・合気会・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁)は、2月10日、研究者6名、事務局より2名が出席して日本武道館大会議室で実施された。

本事業では昨年開催された第11回全国合気道指導者研修会を振り返り、次回の全国研修会に向けた内容を協議したほか、学校現場での合気道指導者の在り方等について意見が交わされた。

開講式では、主催者挨拶としてかなざわたくし金澤威公益財団法人合気会総務部長が「中学校における合気道の実施校が97校まで増えました。本日は昨年の全国研修会を振り返りながら、次回どのような形で行っていくかを検討、協議します。学校でより良い形で合気道の授業が行われるように、しっかりと研究していきます」と抱負を述べた。

開講式後、昨年の全国研修会の振り返りと次年度の研修会の内容の検討が行われた。その中で、金澤研究者から「参加者には中学校武道のための研修会であるという認識をしっかりと持ってもらうことが必要。また、合気道経験のある都道府県の連盟推薦者や未経験の学校教員など、参加目的の異なる参加者が関係性を深められる時間を初日に設けて、より打ち解けた状態で実技指導に入りたい」との発言があった。それを受け、いわゆるアイスブレイクをどのような内容で実施するか、具体的な協議を行った。

ひのてるまさ日野皓正研究者からは「教員の参加者は技術的な

向上を求めている人が多い印象がある。技術に不安があると、「合気道指導の手引」があっても指導する際にためらいがでる。研修会で技術を学び、先生方の持つ生徒指導の技術と結び付けて模擬授業を行ってもらうことで自信がつくのではないかと提言があった。

午後からは中学校における合気道採用校をより増やす方策や、学校現場における外部指導者の役割について意見交換を行った。

採用校を増やす案として、試合がなく、争わないという合気道の特性や、畳一枚あれば形稽古のみで性別や体格に関係なく上達できる良さがあるという面からもっとアプローチをかけるのはどうか、という意見が挙げられた。

学校現場での指導においては、金澤研究者より「指導者はどうしても技術指導に走りがちになるが、合気道を教材として何を指導するかを考えなければならない」との発言があり、あくまで教育者という立場で授業に臨む必要があることについて意識共有を図った。

開講式では、研究者を代表してたつぎゆきとし立木幸敏国際武道大学体育学部教授が「昨年の全国研修会では、現場の先生が指導経験を活かして、しっかりと模擬授業を行っていたので、これからはこうした先生方が指導法研究の中核になってほしいと思います」と講評を述べた。

最後に、和田課長が主催者挨拶を述べ、予定していた内容をすべて終了した。